

洞爺湖ビジターセンター 2014年度 自然ふれあい通信

洞爺湖ビジターセンター・火山科学館では毎月1回、洞爺湖周辺の自然と親しむ「自然ふれあい行事」を開催しています。その様子を少しご紹介します。

8月30日(土) 洞爺湖の水しらべ



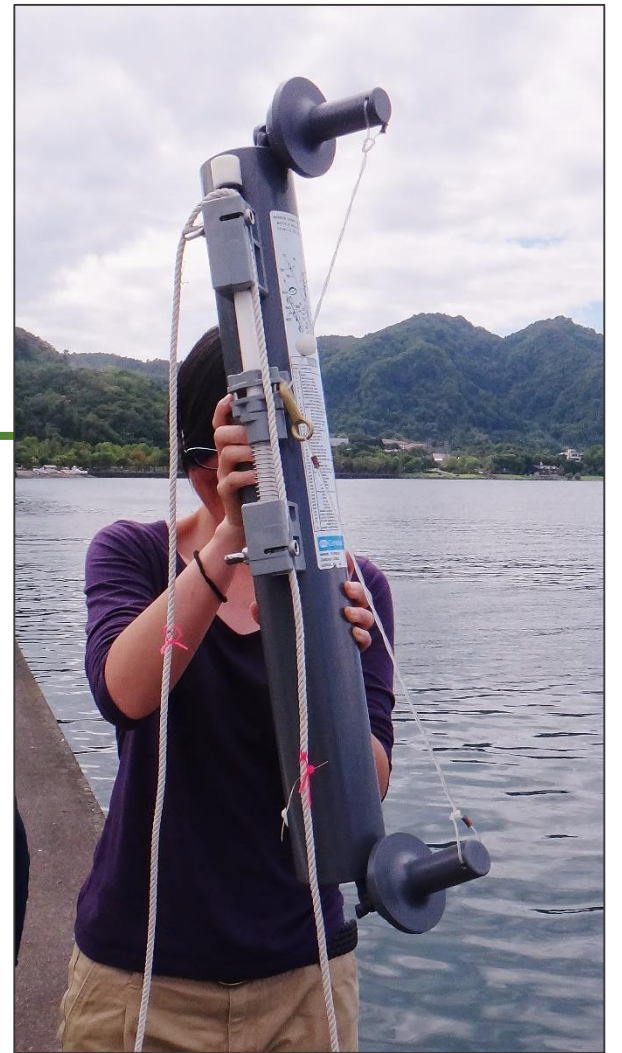
夏休みが終わり、洞爺湖では秋の足音が聞こえ始めてきました。8月の自然ふれあい行事は酪農学園 大学環境地球化学研究室の協力のもと、洞爺湖の水をとって調べる「洞爺湖の水しらべ」を行いました。洞爺湖は日本で9番目(カルデラ湖に限ると3番目)に大きい湖で、透明度が10m以上ある水がキレイな湖です。今回の行事では温泉街からロープをたらし水を取り、硝酸(しょうさん)という物質の濃度を簡単に測ります。

洞爺湖はもっとも深いところで約180mもある深い湖です。深いところの水を正確に調べるには特殊な器具が必要になります。そこで登場するのが右の写真の「ニスキン採水器」です。上下のふたを開けたまま水の中に沈め、水をとりたい深さでふたを閉めると、その深さの水がとれます。洞爺湖の水がどんな状態になっているか知るには、表面だけではなく、深いところの水を調べる必要があります。



洞爺湖の水をニスキン採水器からボトルにうつしかえませす。正確に分析するための工夫がたくさんあります。

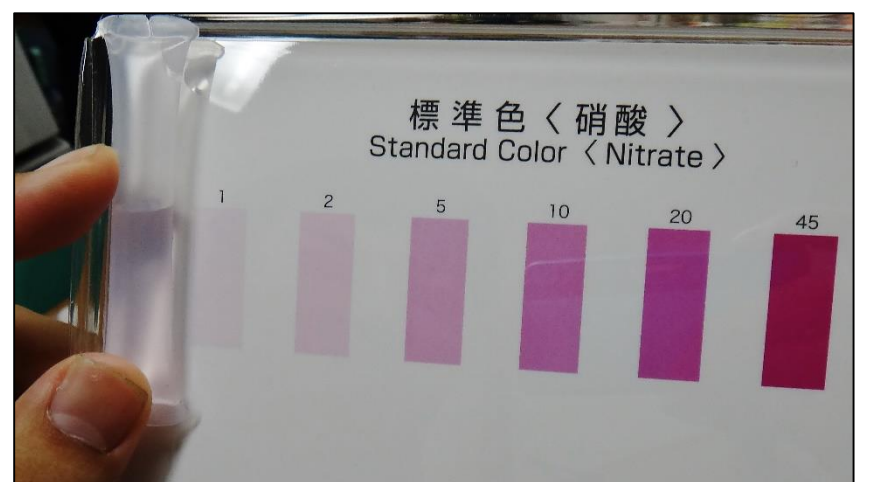
ニスキン採水器。これで深いところの水もとれます。



ニスキン採水器。これで深いところの水もとれます。

水を取り、ボトルにうつしかたら、ビジターセンターでその水を分析します。今回はパックテストというかんたんな分析道具を使って、硝酸という物質の濃度を測りました。硝酸は主に生活の中で出る畑の肥料やごみ、下水などが分解された最終生成物として自然界に存在します。硝酸は植物プランクトンなどの栄養として消費されていますが、硝酸が増えすぎると水がにごったり、人体にも悪影響がでたりしてしまいます。洞爺湖は貧栄養湖でもともと、水の中の栄養分が少なくキレイな湖なので、硝酸濃度は低めでした。

水は地球上のあらゆるところを循環しています。自然環境になにか異常があると、水質にも異常が出てくることが多いです。水を調べることは環境の状態を知るうえで、とても重要なことです。普段は当たり前前に接している「水」ですが、少し違う視点で目を向けてみるとそのありがたさがわかります。水を大切にしましょう。



洞爺湖の硝酸濃度はとても低い値でした。キレイな湖を守っていききたいものです。

